

# 溝切機の利用効果

## 1. 中干の効果をも高める

無効分けつ期の窒素を逃がし、不必要な分けつを抑え、加里の効果を高めて稲を強剛にして倒伏に強くなります。作溝により、排水を完全にして、溝から耕盤に亀裂が入り、不透水層を破り、中干し後の透水性を高め、幼穂形成期から登熟期にいたる最も大切な時期の土壌条件を良好にします。

## 2. 適期落水による品質向上

コンバインの走行に合わせて落水時を決定するとき、収穫を適期より早くすると、登熟不良になりますが（右図）作溝により排水が容易になり、出穂後35日頃の落水適期まで、灌水出来るため、稔実を良好に屑米を少なくし、品質向上・増収効果を高めます。

## 3. 土中への酸素補給をし、有毒ガスを排除する

稲麦ワラのすき込みによる有害ガスを排除する効果があり、土中の酸素補給によるしい。

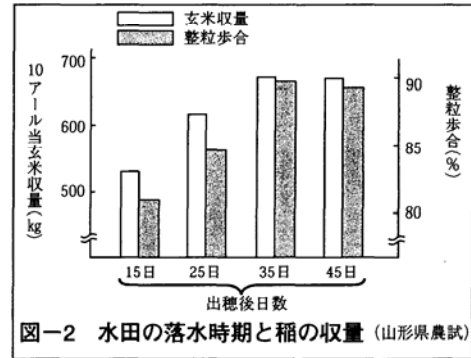
## 4. 作業能率の向上

地表水の排水が良くなり、地耐力が強化され、コンバイン作業防除作業、ヒエ抜き作業がやりやすくなります。

## 5. 裏作物の作付が容易になります。

稲収穫後も排水が良好となり、土壌が乾燥するので、麦・野菜等の播種作業が容易になり、裏作振興に役立ちます。

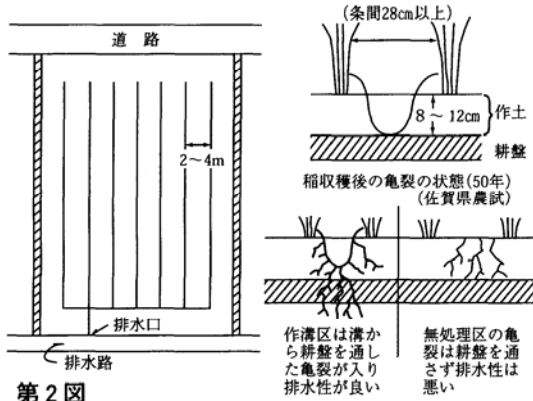
## 水田作溝の効果も大



## 中耕・溝切り作業の技術体系

第1表 稲作作業体系における中耕作溝作業の位置づけ

生育時期	活着期	分けつ期			幼穂形成期	減期前	出穂期	登熟期			
		初期	中期	後期				初期	中期	後期	
水管理	浅水	灌水	灌水	中干し	灌水	間断灌水	灌水	間断灌水		落水後30日	落水後35日
中耕		田植後15日	20~25日								
作溝				中干し直前(有効分けつ決定期後)場合によっては2回も可。作溝後中干しに入ること。							



## 6. 水田中干の方法

(1) 稲作作業体系における中耕溝作業の位置付け 第1表の通り

(2) 作業時期・作業方法

- 中耕=田植え後10~15日、20~25日の2回 稲わらすき込みと排水不良田。

田植え後15~20日

- 1回…排水不良田(浅水にして行うこと)

- 溝切り=有効分けつ決定期以後すみやかに実施する。

溝切り予定日2~3日前に落水し、土をややかためてから実施する。なお土がかたすぎた場合には走り水しておく。土がや、しまり走り水状態が作業条件としては好ましい。作業後はそのまま、中干しに入り、溝をかためること。

- 作業間隔=2~4メートル(排水状況により加減する)

- 作溝深さ=8~12センチ(作土深さに相当するのがよい)

第2図参照